

きし眉毛は更になし、

眼中するどく、黒目玉にして、顔色赤く、晝る樊噲張飛の顔を見るにひとし、長も低からずして、大成丈なるもの也、婦夷は髭もなく、色も日本人のごとく、生れ付にはさして替りし事なく、男夷女夷とも、小耳には環を入れてあり、其環に大小ありて、銀或は銅、あるひは鐵も見ゆれども、右圖略のごとし、初めに入し穴の切て、環の入れざるは、新に入穴をあくると見へて、破れし穴耳たぶに二つあるもあり、女夷は首にシトケといふものをかけて居るなり、悉くかくるにもあらず、衣服のよきを著たる女夷のかけて居るを見れば、貴賤のわかちなるにや、また富饒の夷なるゆへにや、是又詳ならず、

〔夷諺俗話一〕蝦夷地風俗之事

西蝦夷地スツといふ場所の内に、辨慶崎と云あり、又其先イリヤといふ場所の内に、來年の崎といふあり、是は辨慶蝦夷人に對し、來年來るべしと、約諾せし處故、爰を來年崎と云傳ふるよし、其外夷言にも、義經をシャマイクル、辨慶をヲキクルミなどいふ事、今に其名あり、○中略斯日本へ從伏なして二千年に近きといへども、未道ひらけず、髪を被り衣を單衣にして、アツシといふ木の皮にて織たるを著し、左衽になして笠鞋履を用ひず、みな裸跣なり、耳には環を穿て飾となし、身體最も色黒く、眉毛一條に連り、總身熊のごとく毛生ひたるあり、故に上古毛人國ともいひたるよし、其性質正直なるもあれ共、交易に馴たる蝦夷は偽謀の事あり、一體其性勇奸にして直ならず、女は皆唇と肘に入墨して文をなす、扱又文字の曆なき故、甲子記年を知る事なく、寒暖を以て春秋を分ち、月の盈缺を見て朔望を知り、金銀の通用なし、古器刀劔を以て寶とし、山野海河を獵し、群畜諸魚を獲りて食とし、居室は只四壁のみにて、夫も熊笹を累ね、或は葭茅等を以て是を圍ふ、家内を見れば、土間へアアスケ是は葭簀の事也、是を敷、其上にキナといふ物を敷、是は管苦の事也、